

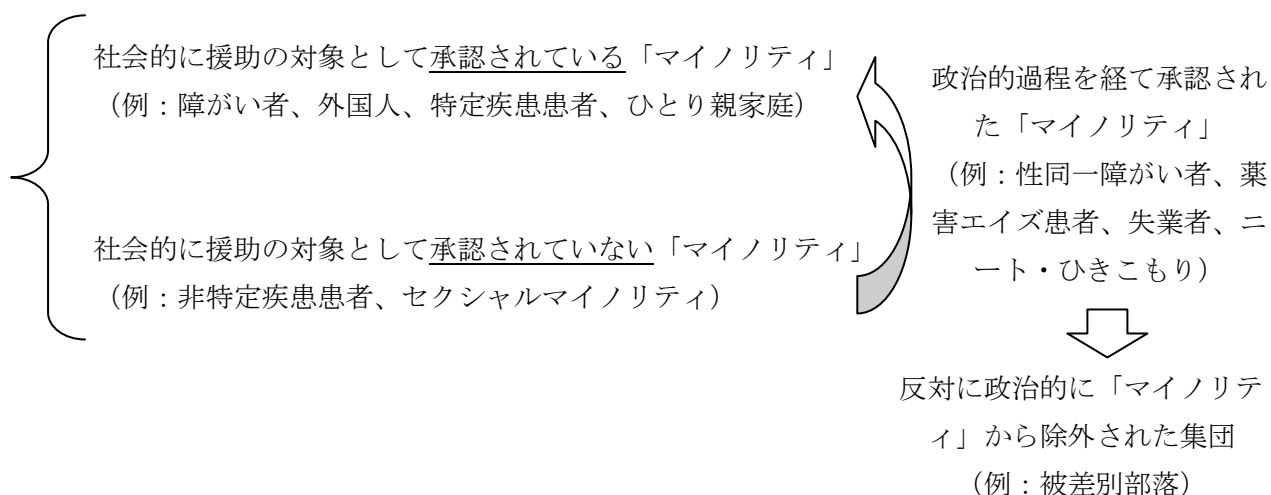
小地域活動における「マイノリティ」と援助

三島コミュニティ・アクションネットワーク 室田信一

1. 「マイノリティ」をめぐる考えかた

◆ 「マイノリティ」とは

- 「マイノリティ」=要援護者ではない。むしろ「マイノリティ」であることが特権にさえなりうる。
(例：歌舞伎役者 vs. 旅芸者)
- 反対に、要援護者=「マイノリティ」でもない。
(例：高齢者)
- 「マイノリティ」の承認



◆ 「マイノリティ」をめぐる3つの問題

A) 政治的な問題 (承認の問題)

→ 政治的はたらきかけが必要

B) まず、支援が必要という現実

→ 必要の充足 { サービスへのつなぎ
サービスの開発 (さらなる支援の必要) → 政治的はたらきかけ

C) 承認に伴う偏見 (差異を承認することによる逆差別)

- 多様性を推進する活動が必要 (ストレングスの視点)
- 困った人を助けてあげるのではなく、誰にとっても住みやすい社会づくり、地域づくりを一緒にするという視点=「誰もが貢献したくなる社会」「一人ひとりが主人公の社会」

2. NPO 法人 M-CAN での実践

◆主な事業と活動内容

- 住民参加型サービス（まちかどデイハウス、配食サービス、親子のつどいの広場）
- 地域のセーフティネット形成（民生委員による見守り訪問活動の組織化と CSW・専門機関による連携）
- まちづくりの拠点（駄菓子倶楽部みかん屋）

◆実践事例1：インターネットラジオの軌跡

<はじまり>

セネガル出身の男性 A さん。30代。日本人の女性と結婚し、子どもが2人いる。
いろいろと仕事をしてきたが、定職に就くことがなく、求職活動中。
識字教室で日本語を勉強している。

援助の対象者としてみると

外国人、日本語が苦手、日本の環境に慣れていない（不満を抱えている）

↓

視点を変えると（ストレングス視点）

フランス語が得意、ヒップホップを歌うことが得意、たくさんの人が集まる環境が好き

→インターネットラジオという媒体を通して、Aさんの活躍の場を提供。

→Aさんが社会に貢献できるように、生きがいをもてるように、自尊心をもてるように。

<次のステップ>

そんな折、CSWが地域の民生委員さんと見守り訪問をしていたら…

82歳のBさん（女性）がフランス語を勉強しているときく。

→インターネットラジオを手伝ってほしいと願う。

→社会（Aさんやリスナー）に貢献してほしい。

→見守られる存在から自ら参加する存在へ。人を支援する存在へ。自尊心を抱けるように。

<現在>

ウェブ制作会社を経営するCさんの登場

自称「アスペルガー&ひきこもり」Dさんの登場

Dさんがボランティアとして来た初日の駄菓子屋での会話

Dくん「僕はアスペルガー症候群で人と接するのが苦手なんです。高校を中退して、その後大検を受けて大学いったんですけど、卒業後も仕事に就く自信がないんです…」

Cさん「へー、すごいなあ。俺なんか高校中退して、自分で会社立ち上げて今までやってきたんだから、Dくんだって全然大丈夫だよ。」

◆実践事例2：地域活動支援センターで開催される地域行事

地域の関係機関（M-CAN、地域活動支援センター、地域包括支援センター、民生委員、中学校など）が共同で開催する行事。

誰でも参加できるイベントであり、地域活動支援センターの利用者が積極的に参加できるイベント。地域活動支援センターを開かれた空間に、しかし…

→「マイノリティ」参加という演題 → 過保護が生み出す逆差別？

3. 「マイノリティ」に関わる専門職として大切にしたいこと

◆専門職が陥りやすい罠

援助を必要とする「マイノリティ」=守ってあげなくてはならない存在、という枠組みを越えて
→その人の「ストレングス」に着目しなくなってしまう。

→専門職自身が先入観を疑うことを忘れてしまう。自明を問うことをしなくなってしまう。

◆「福祉教育」や「啓発」という幻想？

専門職が大切にしている価値観（多様性の尊重）が必ずしも地域で受け入れられるとは限らない
→「福祉教育」や「啓発」が大切というが

→どのようにして「学びあい」の土壌をつくりだすかが大切

◆人間が一番もったいない

理想主義と言われるかもしれないが…

世界中の人が平和な社会に向かって手をつないだ瞬間、その世界は平和なはず。

行政だろうと、民間組織だろうと、〇〇人だろうと、〇〇者だろうと、手をつなげるはず。

お互いの力を合わせられるはず。

でも、気がつくと、その核となる福祉の専門職同士が専門領域のせめぎ合いや既得権益の奪い合いをしてしまっているのではないか？

そうした衝突が、本当に地域社会にとっていいことなのか？